

**大学入試センターが大学の求めに応じ記述式問題等を提供する方式の
試行調査の問題の正答例及び正答の条件の例**

第1問 正答例

問1 演繹によって導き出される結論には前提に含まれている既知の情報しかなく、何ら新しい未知の情報を含まないから。(五
三字)

正答の条件の例

- ① 六〇字以内で書いているもの
- ② 「演繹」がどのような推論であるかが適切に書かれているもの
- ③ ②を踏まえて、未来を予測できない理由が適切に書かれているもの

問2 人間の論理的機能は、情動や内臓機能をつかさどる大脳旧皮質や脳幹によって支えられていること。(四五字)

正答の条件の例

- ① 五〇字以内で書いているもの
- ② 人間の論理的機能が「感情や情動をつかさどる大脳旧皮質」や「内臓の作動をコントロールする脳幹」などに支えられて
いることに触れているもの

問3

人工知能は、過去の膨大な気象データや現在の気圧配置等のデータから、今日の降水確率をかなり高い確率で予測することはできる。なぜなら、確率を計算することは形式的な論理操作がもつとも得意とすることだからである。一方、人工知能は、今日の降水確率の予測から、外出するときには必ず傘を持っていくべきであるということや万人に納得させることはできない。なぜなら、傘を持って出かけるかどうかの判断には、傘を持ち歩くことへの個人個人の感情や情動が大きく関わるからである。したがって、人工知能には形式的論理操作だけを委ね、その成果を人間が感情や環境変化に柔軟に対応して活用していくことを考えていくべきである。(二九二字)

正答の条件の例

- ① 二五〇字以上、三〇〇字以内で書いているもの
- ② 具体的な場面を一つ挙げているもの
- ③ ②で挙げた具体的な場面について、人工知能によってできることを「形式的な論理操作」ができることを根拠に書かれているもの
- ④ ②で挙げた具体的な場面について、人工知能によってできないことを「環境変化に柔軟に対処できない」ことや、「感情や情動」、「生理的な反応」ができないことを根拠に書かれているもの
- ⑤ 本文の主旨と③・④で挙げたことを踏まえて、自分の考えが適切に書かれているもの

第2問 正答例

問1 ⑤

問2 目の前の人の顔が突然消えることは孤独や死の体験に等しく、また突然現れることは再生を意味し、社会復帰する体験に通じるものとして解釈できる。(六八字)

正答の条件の例

- ① 七〇字以内で書いているもの
- ② 「いない・いない・ばあ」の一度顔を隠す行為は、子どもにとっては「孤独(死)」の疑似体験であることを書いているもの
- ③ 「いない・いない・ばあ」の再び顔を見せる行為は、子どもにとっては「死からの社会復帰(再生)」を示していることを書いているもの

正答例 A (文章Ⅱの主張に賛同する正答例)

文章Ⅰは、子どもが現実の社会への適応訓練を行い、大人の価値観を身につけていくための、社会生活の模型としての遊びの性質を論じているが、文章Ⅱは、現実の社会生活にも還元できない、多様な遊びに共通するものを見だし、そこに遊びそのものの独自性を認めるべきだとして、文章Ⅰとは異なる見解を述べている。たしかに、現実社会の模型としての側面を持つと考えられがちなままと遊びのことを考えても、そこで演じられる家族は、必ずしも現代の多様な家族構成を反映しえない。にもかかわらず子どもたちがそれに熱中することを見ても、そこには現実の社会生活の模型という以上の独自性があるとす文章Ⅱの主張は適切だと考える。(二九五字)

正答例 B (文章Ⅱの主張に賛同する正答例)

文章Ⅰは、子どもが現実の社会への適応訓練を行い、大人の価値観を身につけていくための、社会生活の模型としての遊びの性質を論じているが、文章Ⅱは、現実の社会生活にも還元できない、多様な遊びに共通するものを見だし、そこに遊びそのものの独自性を認めるべきだとして、文章Ⅰとは異なる見解を述べている。たとえば、かくれんぼをしていたときに、鬼と子の交代は何度も繰り返され、鬼になったからといって落ち込むようなこともなかった。そこで目指されていたのは隠れる・見つけるという相互行為そのものの快感だったはずだ。こうした体験からも、遊びには現実社会と異なる独自性が認められるべきだと考える。(二八七字)

正答例 C (文章Ⅰの主張に賛同する正答例)

文章Ⅰは、子どもが現実の社会への適応訓練を行い、大人の価値観を身につけていくための、社会生活の模型としての遊びの性質を論じているが、文章Ⅱは、現実の社会生活にも還元できない、多様な遊びに共通するものを見だし、そこに遊びそのものの独自性を認めるべきだとして、文章Ⅰとは異なる見解を述べている。しかし、たと

えば、ある参加者にとつては純粋な遊戯と思われた行為が、別の参加者には現実社会における人間関係を反映したものととして深刻に受けとめられることがある。そうした差異自体が、参加者相互の現実社会における立場の違いによつてしばしば生じることからも、遊びの中にも現実の社会生活との接点を認めるべきだと考える。(二九九字)

正答例D(文章Iの主張に賛同する正答例)

文章Iは、子どもが現実の社会への適応訓練を行い、大人の価値観を身につけていくための、社会生活の模型としての遊びの性質を論じているが、文章IIは、現実の社会生活にも還元できない、多様な遊びに共通するものを見だし、そこに遊びそのものの独自性を認めるべきだとして、文章Iとは異なる見解を述べている。たとえば、かくれんぼをしていたときに、なかなか見つけてもらえず、仲間はずれにされたようで寂しく思ったことがあったし、ようやく見つけてもらえたときには仲間であることの喜びを感じたこともあった。このように、遊びを現実の人間関係と完全に切り離して考えることはできない。(二七七字)

正答の条件の例

- ① 三〇〇字以内で書いているもの
- ② 文章Iの遊びの捉え方の要約を含んでいるもの
- ③ 文章IIの遊びの捉え方の要約を含んでいるもの
- ④ ②や③を踏まえた、遊びに対する、自分の考えを書いているもの
- ⑤ ④に即した具体例が提示されているもの